

## 漁協青壮年部による水産教室の取り組み —周りを巻き込んで漁業の魅力を発信—

浜坂漁業協同組合青壮年部  
浜根 秀樹

### 1. 地域の概要

私たちが住む美方郡新温泉町は、日本海に面した兵庫県北西部に位置しており、西は鳥取県、東は古くからカニの産地として有名な香美町に隣接している(図 1)。リアス式海岸が続く沿岸部は山陰海岸国立公園に、山岳地帯である内陸部は氷ノ山後山那岐山国定公園に指定されるなど自然豊かな町であり、水産業、農業、酪農などの第一次産業が特に盛んである。



図 1 新温泉町の位置

### 2. 漁業の概要

浜坂漁業協同組合には、平成 27 年 3 月末現在、正組合 209 人、准組合員 153 人、計 362 人の組合員が所属している。「松葉がに」として有名なズワイガニをはじめ、ホタルイカ、ハタハタ、カレイ類などを水揚げする沖合底びき網漁業が基幹漁業で、浜坂漁協の漁獲金額全体のうち、約 91 %を占めている(図 2)。

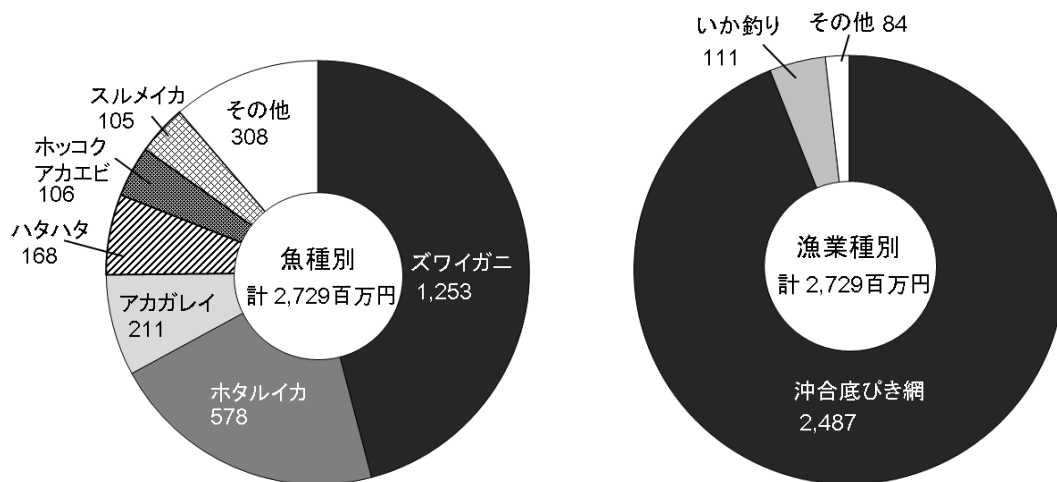


図 2 平成 26 年の浜坂漁協の漁獲金額の内訳 (単位: 百万円)

### 3. 研究グループの組織と運営

浜坂漁業協同組合青壮年部(以下、浜坂漁協青壮年部)は、14 人の部員が所属している。主な活動内容としては、地元の小学生やその保護者を対象とした水産教室や料理教室等を実施して

おり、魚食の普及、地元漁業の周知に務めている。

#### 4. 研究・実践活動の取り組み課題選定の動機

前述のように新温泉町は漁業が盛んな地域であるが、他の漁村地域と同様に漁業者数の減少が進み、住民の漁業に対する関心が低くなるとともに、地元産の水産物を食べる機会も減少していた。特に小学生の漁業に関する知識や魚食の機会が極めて低いものであったため、「地元漁業の周知」「魚食普及」の2点を重要な課題として設定し、その2点を解決する最も効率的な手法として、地元の子どもたちとその保護者を対象とした水産教室に取り組んでいくこととした。

また、多くの人数を対象にする水産教室は個人では実施できないため、漁協青壮年部全体の活動として取り組むこととした。しかし、私が青壮年部長に就任した平成14年当時、青壮年部は実質的に活動休止状態であったため、この活動を行うことによって、同時に青壮年部の再起を図っていくことを決意した。

#### 5. 研究・実践活動の状況および成果

一度に多くのことを実施することは難しいため、以下の3ステップに分けて目標を設定し、段階的に取り組んでいくこととした。

##### 【目標の3ステップ】

- ① 地元小学校を対象とした普及活動
- ② 地域の関係者を巻き込んだ活動の展開
- ③ 都市部への普及活動

##### (1) 地元小学校を対象とした普及活動 ～ステップ1～

平成14年、浜坂漁協青壮年部の部長に就任したばかりの私は、知人2人とともに地元の小学校に出向き、私たちが普段営んでいる漁業について説明させてもらった(図3)。そこで小学生と話をすると、普段私たちが捕っている魚を食べないどころではなく、地元の漁師の存在すら知らない子がいることが分かった。そこでまずは、海を身近に感じてもらえるような取り組みを行うことにした。

平成15年7月、地元の小学生に海をより身近に感じてもらうため、体験乗船を開催することにした。多くの小学生が乗船できる漁船がなかったため、海上保安署に依頼した結果、巡視艇に乗船させてもらえることとなった。参加者は、地元小学校1校に案内を出して募集し、地元の漁港で集合・解散する内容とした。

この取り組みを実施した結果、小学生36人、保護者6人の参加があった。海上保安署は、2隻の巡視艇



図3 漁業に関する講義



図4 小学生を乗せた巡視艇

とヘリコプターを出勤させるとともに（図 4）、海で遊ぶ際の注意点等も説明してくれた（図 5）。小学校および海上保安署との事前調整は私と漁協の職員で行ったが、当日は青壮年部員 7 人をやや強引に連れ出した。

参加者は、乗船体験についてはおおむね満足していた。しかし、巡視艇に乗っているため、漁業に対する理解という点では効果が少ないと考えられたので、翌年度からは漁船を使用した乗船体験を実施することにした。小学校および海上保安署への依頼、内容の打ち合わせ、日時の調整、乗船者名簿の作成などの事前準備が必要であり、加えて、当日も誘導や安全監視を行う必要があったが、複数の小学校が参加して実施できる余裕があると思われたため、翌年度からは町内全体の小学校に案内を出すことにした。



図 5 海の安全講習会

## （２）地域の関係者を巻き込んだ普及活動の展開へ ～ステップ２～

平成 16 年から平成 27 年現在まで、新温泉町内の全ての小学校 6 校を対象として、漁船の乗船体験を柱とした「水産教室」と名付けた取り組みを行っている。水産教室では乗船体験と併せて、地元の兵庫県立香住高校海洋科学科シーフードコースの教員が教える缶詰製造体験（図 6）、さかなのさばき方教室、プランクトン観察会、漁業や缶詰に関する講義など、漁業に関するさまざまな内容の取り組みも行っている（表 1）。昼食は毎回、地魚とトロール漁で捕れた魚を使用して提供している。



図 6 缶詰製造体験

表 1 年度別水産教室の内容

企画内容	実施年度												
	H16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	
乗船体験	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
トロール漁見学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
プランクトン観察会	○	○	○	○	○								
さばき方教室			○	○	○	○							
缶詰製造体験							○	○	○		○	○	
種苗放流体験								○	○				
料理教室						○				○			
海に関する講義			○	○	○	○	○	○	○		○	○	
高校の施設見学						○	○						
海保・水難救助訓練										○			

対象とする小学校や実施する内容を拡大したことで、準備に要する負担も大きくなったが、さまざまな機関の協力により、現在まで水産教室を継続することができている。

水産教室の柱となる乗船体験については、兵庫県立香住高等学校海洋科学科に依頼し、実習船「但州丸(358トン)」の乗船と同船によるトロール漁業の見学が可能となった(図7)。

国土交通省が定める乗船の安全基準を満たすためには、安全マニュアルの作成や乗船者名簿の取りまとめ・作成等が必要であり、兵庫県の水産業普及指導員や新温泉町の職員の協力を得て実施している。また、各小学校への案内についても、青壮年部員のみでは対応できないこともあり、県や町の協力を得てチラシや実施要綱を作成し、共同で全ての学校を直接訪問して実施している。さらに、船が発着する港までの小学生の移動手段は、新温泉町が用意したマイクロバスを使用している。



図7 トロール漁見学

また、昼食は浜坂漁協女性部が地魚を使った料理を用意しており、浜坂漁協の職員がその食材を調達している。プランクトンの観察会は、県の研究機関である但馬水産技術センターにおいて実施させてもらっており、以上のように現在は7つの機関・団体と一緒に水産教室に取り組んでいる(表2)。

表2 水産教室の協力機関・団体と内容

協力団体	協力内容
香住高等学校	実習船の提供、施設・機材の提供、缶詰製造、高校生による指導
県水産事務所	関係団体との調整、各種資料作成、小学校への案内
県但馬水産技術センター	施設・機材の提供、海の講習会講師
新温泉町	参加者調整・取りまとめ、バスの提供、小学校への案内
浜坂漁業協同組合	食材調達、費用の管理
浜坂漁協女性部	昼食(地魚)の提供
海上保安署	海の講習会講師

なお、実習船の運航は高校のカリキュラムとして、バスの運行は町の事業として実施されているため、これらの費用の負担は無く、一部の費用は水産業多面的機能発揮対策事業の助成を受けて開催している状況である。

### (3) 参加者の反応

参加者数は年によって学校の行事等と重なることもあり、毎回変動が大きいですが、12年間でのべ350人以上の参加があった(表3)。

表3 水産教室の年度別参加者数(小学生+保護者)

単位：人

実施年度											
H16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
53	記録なし	49	台風中止	37	55	31	22	27	台風中止	61	21

平成27年の水産教室終了後のアンケート(回答者21人)では、回答者全員が「漁業の役割について理解できた」と回答している。また「今後、家で魚を食べる機会が増えそうか」という問に対して、21人中18人が「増える」と回答しており、魚食普及に一定の効果があると考えられた(図8)。

また、「どんなことが印象に残っているか」という質問に対して、私たちが最も期待していた「海の大きさ」や「地元の魚の美味しさ」といった回答よりも、「環境問題」という回答が一番多かったことは意外であった(図9)。トロール漁体験で漁網にゴミが入っていることを指摘している子どもも多くいたので、漁業者が海の環境を守っていることが印象的だったのだろう。その他にも、料理教室で伝える漁師ならではのレシピや、多くの漁師が海で操業すれば事故等の見張りになることなど、水産業界が持つ多様な役割について、身をもって体験してもらえ大変良い機会であると感じている。

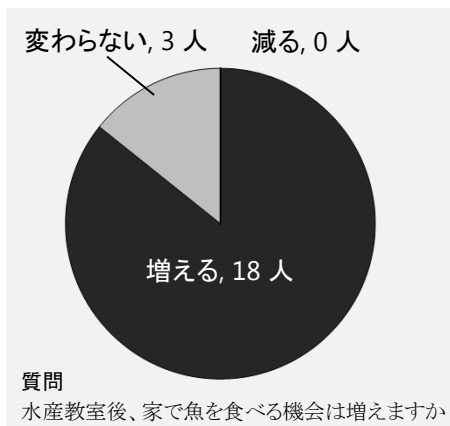


図8 水産教室参加者へのアンケート結果1

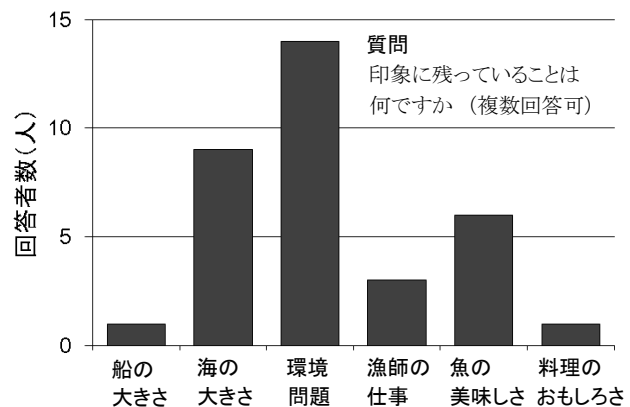


図9 水産教室参加者へのアンケート結果2

### (4) 青壮年部の変化

水産教室の準備や運営のために、青壮年部には従来と比べものにならない負担がかかるようになったため、古参の部員の多くが脱退してしまった。その反面、在籍する部員からは「来年度はどうするべきか」など活発に意見が出るようになり、青壮年部の変化を感じ

始めた。

そして、出てきた意見を次年度の活動内容に反映することにより、部員はより関心を持って取り組むようになってきている。また、部員は小学生や保護者と直接交流することにより、かつての私のように青壮年部活動の重要性を少しずつ実感するようになったようである。水産教室は大変負担の大きい取り組みではあるが、それでも毎年開催する意義があると感じている。



図 10 昼食の用意をする青壮年部員

浜坂漁協青壮年部は、平成 14 年に部員 3 人で小学校を訪問したところから再出発したが、現在の部員は 14 人になっており、前向きに参加してくれる部員がほとんどである（図 10）。また、本業である漁業の話題など、青壮年部活動以外のことに関する意見交換が活発になったり、他地区や他業種との交流に参加したりする部員が増えていると感じている。これが現時点での最大の収穫ではないかと私は考えている。

私がこの取り組みを通して分かった青壮年部の活性化に必要なことは、部員に活動の必要性を実感してもらうこと、そして課題を共有して一緒に活動を進めることだと思う。

## 6. 波及効果

### （1）参加者から漁師が誕生

現在、水産教室に参加した小学生から 2 人が漁師になり、地元の沖合底びき網漁船に乗船して漁業に従事している。2 人とも船主の血縁者ではあるが、水産教室に参加した時のことを良く覚えており「地元の漁業が理解できる良い機会であった」「自分の家の仕事がよく分かり誇らしかった」と振り返っている。私にとっても非常にうれしいことであり、これからは彼らが子どもたちに漁業を教えていく番であると期待している。

### （2）他地域への広がり

兵庫県の日本海側には、私が所属する浜坂漁協青壮年部のほか、但馬漁協の 4 地区（香住地区、柴山地区、竹野地区、津居山地区）に青壮年部がある。

私たちが水産教室を始めて数年経つと、その評判は各地区に伝わり、平成 19 年から香住地区と津居山地区が、但州丸と県の調査船「たじま」と協力して水産教室を始めた。平成 22 年から柴山地区も水産教室を実施し、現在は 4 地区で恒例行事として根付いている。

その内容は、中間育成中の魚のいけすを見学したり、漁協女性部が講師となって参加者が昼食を作ったりするなど各地区で独自の工夫がなされている。

### （3）高校の生徒の学び場として

私たちが実施する水産教室では、香住高校の調査船や加工実習室を使用させてもらっている。最近では、有志の生徒が漁業の説明や船内案内を担当してくれたり（図 11）、缶詰製造体験では生徒が魚のさばき方を小学生に教えてくれたりする。将来、教育関係の

仕事に就くところを考えている生徒にとっても、  
良い経験になっているとのことである。



図 11 漁業の説明をしてくれる高校生

## 7. 今後の課題や計画と問題点

現在、私たちが営む漁業が抱える課題の 1 つとして、大消費地である都市部での認知度の不足が挙げられるため、当初は都市部への普及活動を行うことを最終目標（ステップ 3）としていた。しかし、町内への募集案内と参加者に対する送迎で精一杯の状態であり、都市部から参加者を集めることを検討する段階にも至っていない。今後は、これまで築きあげてきた関係機関等に相談しながら、都市部との交流も検討していきたい。

また、青壮年部の活動についても、これからより多くの者が参加して取り組めるように、地域における後継者対策等も推進していきたいと考えている。